飛耳長目

中学校出身者、小学校長になる…

田布施町立田布施西小学校長　山住英朗

中学校美術の教員であった私が、今年度より小学校に勤務することになった。

正直、小学校と中学校の文化の違いに戸惑うこともあったが、毎日が「目から鱗」のことばかりだった。

まず、ぶつかった壁は「入学式の式辞」である。今まで、ある程度言葉の意味が分かっている中学生を相手にしていたので、「字」も「言葉」もまだわからないであろう新入生に、どう話をしたらいいのだろうか？悩んだ挙句、思いついたのが「絵」で表すことである。元々美術の教員であった私にとっては、最大の強みであることに気が付いた。そこで、本校の「目指す児童像」である、「考える子・やさしい子・つよい子・はたらく子」をイメージさせる絵を描き、入学式に臨んだ。果たして子どもたちの反応は…。最初に、何かを考えている感じの絵を見せると、目を輝かせながら大きな反応を示してくれた。それまで、緊張気味で固くなっていた子どもたちが、一気に表情豊かになったのである。残った三枚の絵に対しても、しっかりと自分が思ったことを口に出し、とてもにぎやかな式辞を終えた。この式辞は、来賓や保護者にとっても珍しく、「こんな式辞は初めてだったが、わかりやすかった。」と好評だった。改めて、「絵の持つ力」を思い知った経験であった。

これに気をよくした私は、全校朝礼でもスケッチブックに「絵」と「わかりやすい言葉」を貼り付け、それを見せながら子どもたちに話をし続けている。話す内容は、その時々の子どもたちの様子や、日頃の職員室での先生方の会話の中から、子どもたちに話しておきたいことを選んだ。今まで話してきた内容は、「ふわふわことばとちくちくことば」から言葉の重みを感じてほしいという話。「こだまでしょうか」という金子みすゞさんの詩から、自分の心を律することへの呼びかけ。「人はなぜ勉強をするの？」というテーマで、勉強は自分の未来のため、大きく成長するために必要なんだ！という話である。

一年生から六年生までという、発達段階が大きく違う子どもたちに、わかりやすく、絵を見せることで印象付け、心に残る話をすることを心掛けている。子どもたちにはすっかり「絵が得意な校長先生」として定着し、時々、絵を描いてという要求に応えている。今では、「面白きかな小学校長」という心境である。

時々思い出し

周防大島町立和田小学校長　鎌田孝生

明治六年三月開校。平成二十六年三月閉校。一つの学校が百四十一年の歴史に幕を下ろす。現在通学している子どもが最後の十人になる。この子どもたちに学校が残せないのなら、何を残せばいいのだろう。

○　地域の人たちからかわいがられた記憶

昭和三十年まで運動会は離れた神社の境内で行われていた。子どもたちは手に持てるバトン、旗などを運んだ。イス、テント、マット、得点板などの大道具は大人の役目だ。みかんを運ぶための大八車に山盛り積んで運んでくれた人もいた。船に乗せて海を渡して運んでくれた人もいたそうだ。神社の宮司さんから聞いた。船が横付けされ、その向こうの玉入れを木の上や倉庫の屋根から応援している白黒写真は、色あせることなく残っている。

今でも子どものためならばと、地域の人が運動会を手伝う。参観者全員の弁当を配り餅まきもする。教職員や保護者が手を出そうとすると「やらんでええ」としかられる。「がんばれ」「しっかり走れ」の声は子どものすぐ近くで、うるさいくらいに響き渡る。

子どもは、大人からの愛情を感じ取り、それに見事に応えている。

○　自分が輝いた記憶

陸奥太鼓と名付けた和太鼓演奏は伝統だ。岩国基地のペリースクールの小学生と太鼓で交流を図った。身振り手振りでたたき方を教える顔は自分の特技を生かすことができたという思いで輝いていた。シンフォニア岩国でフレンドシップ太鼓として披露した。

和田サロン（お年寄りの会）の訪問では、手と手を握り合って、歌を歌ったり話をしたりする。お年寄りは、全部うなずきながら聞いてくれる。「本を読むのがうまいのう」お年寄りはほめ上手だ。子どもは得意満面になる。ゲームでは笑い合い、お別れの時には両者で涙ぐんでいる。他人に認められた子どもの顔は輝いている。

小さな学校では、誰もが主人公だ。子どもが輝く瞬間は、毎日訪れる。

『和田の人たちみんなからかわいがられたよ。』

『自分は和田小で輝いたよ。』

この二つは子どもの時の記憶として、和田の青い空と青い海の景色と一緒にきっと残っていくだろう。大人になった時学校はないけれど、時々思い出し前に進んでいくための勇気となってくれるとありがたい。